

**P08b Chandra 衛星による M16 領域の X 線観測**

岩本 宙礼、坪井 陽子 (中央大学)、杉谷 光司 (名古屋市立大学)、田村 元秀 (国立天文台)

M16 は NGC6611 または Eagle Nebula と呼ばれる散光星雲で、2.1kpc の距離に位置する。この領域には 0.25–3.0Myr の若い星の集団が存在し活動的な星生成領域として知られている。我々は  $17 \times 17$  分角の視野を持つ X 線衛星 Chandra を用いてこの領域を観測し、0.5–8 keV band で約 1000 個の X 線源を検出した。

我々はこの X 線ソースと杉谷らが SIRIUS による赤外線観測で得たデータとの比較を行った。SIRIUS の M16 中心領域の観測は  $4.7 \times 4.7$  分角の視野を持ち、我々はこの領域から約 600 個のソースを X 線検出した。このうち約 70% を SIRIUS によって同定することができた。(同じ領域で 2MASS では 50% しか同定できなかった。)

また elephant trunk 領域  $3 \times 2.5$  分角では 4 個の原始星候補があることが報告されていたが (Sugitani et al 2002)、我々はこのなかの特に赤く nebulosity を伴うソース (P1) を X 線で検出した。P1 は吸収を受けやすい 0.5–2 keV band で 11 photon、吸収を受けにくい 2–8 keV band で 70 photon ほど検出されていて、吸収が高い ( $N_H = 2.6 \times 10^{22} \text{ cm}^{-2}$ ) ことが X 線で確認できた。P1 の温度は、 $kT=5\text{keV}$ 、ルミノシティは  $L_X = 1 \times 10^{32} \text{ erg s}^{-1}$  で通常の Class I 原始星の中では極めて明るいうちの 1 つだった。

本講演ではこれらの解析によって得た M16 における X 線の特性と NIR の関係について報告する。